

白

分の子供が良い教育を得るために住む町を選ぶとしたら、何を参考にすれば良いのだろうか？

「Boston Magazine」が毎年組んでいる「Best Public Schools」の特集号を参考資料にする人もいる。だが、今年の九月号の「Smartest Public School」は、ちよつと志向を変えて、生徒一人頭の教育費とMCASスコアの改善率を重視している。

雑誌は売るために新たなテクニクでランキングを試みるのであろうが、この選択基準では、毎年スコアが高いために改善する余地がほとんどなく、しかも一人頭の教育費がや高いレキシントン高校は、SATスコアの平均点が(入学試験などの選考過程がある高校を除いて)州で最高位だったにもかかわらず、「Smartest Public School」では、アカ

デミックでは五位、コストの効率性では五二位にランクされている雑誌では編集ミスでリストから漏れている。*註参照。

何よりも、良い学校をランキングしようとするのが無意味だ。まず、SATスコアだが、試験の点を重視する親が集まる町の学校の点数が高いのは学校のせいではない。また、教育費にしても、多くの公立学校を圧迫するのは特別教育の費用である。法により、その町の公立学校が生徒の特別教育のニーズに応えられない場合は、公立学校はその生徒が学区外の公立学校あるいは私立学校に通う費用をまかなわねばならない。校区外に行く生徒が一人増えるだけでも特別教育費は急増する。それだけでなく、ガソリン代の高騰による光熱費やスクールバスの運営費などが教育費全体を圧迫しており、教育の改善どころか、これまでと同じレベルの教育を維持するための費用を捻出することもできなくなっている。資金をかけていない学校は「賢い」というよりも、プログラムや職員を削っているだけのことなのだ。

これまでの号で説明したことだが、この国では地方自治体の固定資産税(マグネットスクール*註)を除く公立学校の費用の大部分をまかなっている。そればかりか、教育費が地方自治体の予算全体に占める割合はほぼ半分なのである(レキシントン町の場合、私が越して来た十三年前は約六十%で現在は約五十%)。この国に数年しか住んでいない人に知っていたら驚かすのは、貸し家やアパートに住んでいる駐在員の子供たちの教育費を払っているのは、学校に通う子供がいない多くの(持ち家がある)町民だという事実である。引退して年収がほとんどなくなった彼らが、教育費の予算を捻

出するために毎年急上昇する固定資産税*註を払い続けるのを拒む気持ちや、それを少しはわかっていたらどうかと思う。

私が会った教育委員たちは口をそろえて、「公立学校はすべての子供のために存在しなければならぬ」と言うが、その難しさを一番良く知っているのも彼らである。彼らがよく聞く苦情に、「公立学校は、できる子と特別教育の子ばかりにリソースを使い、普通の子をないがしろにする」というものがある。成績が優秀な生徒は学校が与える教育の機会を最大限に活用する傾向があるし、レキシントン公立学校の場合、特別教育の生徒は全体の一六%だが特別教育費は教育費全体の二三%

私が会った教育委員たちは口をそろえて、「公立学校はすべての子供のために存在しなければならぬ」と言うが、その難しさを一番良く知っているのも彼らである。彼らがよく聞く苦情に、「公立学校は、できる子と特別教育の子ばかりにリソースを使い、普通の子をないがしろにする」というものがある。成績が優秀な生徒は学校が与える教育の機会を最大限に活用する傾向があるし、レキシントン公立学校の場合、特別教育の生徒は全体の一六%だが特別教育費は教育費全体の二三%

税のオーバーライド*註で費用をまかなうことを住民が拒否する場合、教育のどこかを削るしかない。それが、教育委員の直面する難問である。

「学校は学問さえ教えればよい」そう断言するアジア系の母親に会ったことがある。良い大学に進学させてくれるのが良い高校だという考え方である。「公立学校は読み書きだけ教える

ばよい。オーケストラをさせたければ私立に通わせる」という子供がいない年配の白人女性からの訴えも聞いたことがある。だが、レキシントン町の教育委員たちは学業面での達成が公立学校の唯一の目標だとは思っていない。公教育のさらに重要な目的は、「子供たちが自分自身のユニークな潜在能力を見出し、民主主義や国民の権利と義務を理解し、人間的な成長を遂げるのを援助すること」だと信じている。テストの点を取るためだけの教育では、ひずんだ育ちかたをしてしまふ。そうではなく、スポーツや芸術、人権教育やティーンエイブ

バトルグリーン/連載エッセイ17 渡辺 由佳里 良い公立学校とは？

註釈*)『ボストンマガジン』The best public schoolのランキングはhttp://www.bostonmagazine.com/best_high_school_chart/index.htmlをご参照ください。
*1) マグネットスクール: ある分野で優れた才能を持つ子どもを広域から集める公立学校で、入試や書類専攻があり、多くは大学、州、企業との連携で運営され、あらゆる場から助成金を受けている。
*2) 固定資産税は、持ち家の評価額に応じて課せられる。レキシントン町の場合、2000年の調査では平均5,680ドルであったが、2008年は平均8,788ドルに上昇している。
*3) オーバーライド: マサチューセッツ州では、町が独自に固定資産税率を決めることができるのだが、その自由をなから奪う「条例2.5」がある。これは、税金の値上がりを抑える目的で作られ州の住民投票で可決された条例で、税収入を前年度の2.5%以上増加させてはならないと定めている。しかし、公共施設の新築や改築などで特別な収入が必要になったときには、「オーバーライド」と呼ばれる住民投票で可決されれば一時的措置として覆すことができる。近年は、公立学校の授業や課外授業を維持するためにどの町でも毎年のようにオーバーライドが必要になっている。
*4) マサチューセッツ州 Massachusetts Department of Elementary and Secondary Educationの公式資料による。

★プロフィール★ わたなべ ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。 <著者のブログ> http://watanabeyukari.weblogs.jp/

お詫びと訂正 先月号掲載の「バトルグリーン/連載エッセイ16」の本文中で数字が三カ所抜けていました。不手際をお詫びするとともに以下のように訂正いたします。二段目左から九行目「高校生の100%が」/四段目左から五行目「一時間に11ドルもらえる」/五段目右から四行目「地域銀行を設立し、28人の個人に」。

さて、このような環境で育つ子供たちは、学校に対してどんな感想を抱いているのだろうか？ 来月号では、生徒の視点を紹介しよう。